

## 第 57 回日本核医学会学術総会 印象記

宮田 陽子  
Miyata Yoko

### 1. はじめに

2017年10月5～7日まで、パシフィコ横浜で「核医学の明るい未来に向けて」をメインテーマとして、第57回日本核医学会学術総会が横浜市立大学大学院の井上登美夫会長のもと開催されました。今回は日本核医学技術学会総会学術大会だけでなく、アジア・オセアニア核医学会学術会議（AOCNMB）、アジア核医学技術学会国際会議（ASNMT）も合同開催となり、4学会合同の大規模な会でした（写真1）。合同学会ということもあり、海外からの参加者も見られ、通年よりも国際色豊かな会になったと感じました。

今年のポスター発表は合同開催のため、約半数が英語での発表でした。臨床研究で用いられる核種での症例発表、普段の読影で遭遇したら注意したい<sup>18</sup>F FDGの症例発表、日常臨床で忙しさを理由になかなか検証できていないインスリン使用法の疑問点を解決する発表等、他会場の講演と重なってしまい、残念ながらポスター発表をライブで聞けませんでした。ゆっくりと見て回り知識を増やすことができました（写真2）。

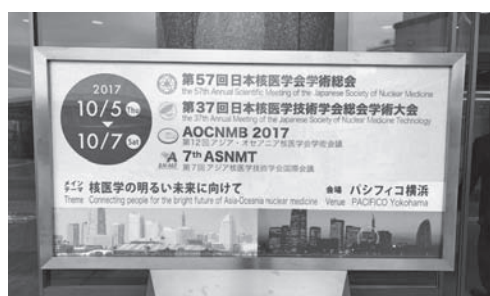


写真1 学会ポスター（会場正面入口）



写真2 ポスター会場

魅力的なシンポジウム、いつも自分の知識の再確認のために受講している教育講演、そして興味のある発表が今回もかなり重複する形になってしまい、数年前から導入されたスマホアプリのおかげで、興味を引くものをすべてチェックし、重なった日程を後から眺めながら、どうやったら一番効率よく多くのことを聞いて回れるかと頭を悩まし、当日を迎えました。個人的にはこのアプリのおかげで、前日までにスケジュールリングが非常にやりやすくなり、聞きたかった講演等を重複のためにうっかり聞き逃すことが減り、IT化様様と思っています。すべてを見聞きできたわけではありませんが、今回重点的に聞いた内用療法とまでしこの会、及び興味を引いた学会発表について報告させていただきます。

### 2. 学会セッション所感

まず内用療法についてですが、2016年5月に承認された $\alpha$ 線内用療法治療薬（塩化ラジウム<sup>223</sup>Ra）の使用開始に伴い、研究機関のみでなく、実臨床の場で核医学の分野以外の方も含め、広く内用療法に関心が

高まっている印象を受けます。本学会では4学会合同の特別シンポジウムとして、「内用療法の国内展開のために」と題し、内用療法を国内で進めていくために、学会、患者団体、法整備や制度設計に関わる厚生労働省の方、放射性医薬品の供給を担う日本アイソトープ協会の方をシンポジストに迎えて、今後日本で内用療法を進めていくために、単なる需要・供給の問題だけでなく、治験の段階で使用される放射線内用療法の未承認薬に関する二重規制の問題点等も含め、研究から実臨床に乗せるまでの包括的な話題が提供されました。今後期待されている $^{177}\text{Lu}$ や $^{225}\text{Ac}$ といった核種を国内に導入するには、 $^{223}\text{Ra}$ と同様の手順を踏めば済むのかと安易に考えていましたが、シンポジウムをうかがっていると国内製造した $\alpha$ 線核種を他の施設に供給するという、シンプルな目標を達成するために、実に複雑に多くの要素が絡み合った問題があるということを確認させられました。シンポジウムの中で今後の日本の核医学診療を進めていくために、多くの人に関わり、様々な視点から $\alpha$ 線治療を推進するための問題点抽出や解決策策定、また1つのまとまった声として国に要望を出す、情報共有を行う、ということが必要という意味で、座長である金沢大学の絹谷清剛先生を始め、複数のシンポジストの方が「核医学診療推進国民会議」への参加を呼びかけられました。筆者は一般会員として参加していますが、ご興味のある方はHP (<http://www.ncnmt.jp/>) を一度ご確認ください。

次になでしこの会ですが、この会は当初核医学の領域に関わる女性同士（医師、診療放射線技師、薬剤師、臨床検査技師）の親睦を図り、情報の交換を行うことを目的とした会として、東京慈恵会医科大学の内山眞幸先生が代表となって発足しました。当初は学会プログラムではなく、プログラム終了後の茶話会で女性限定というところから始まったのですが、現在はプログラムに組み入れられ、男性も参加可能となっています。今年はストレスとレジリエンスというテーマで講演がありました。毎年興味のあるテーマで欠かさず参加していますが、なでしこの会が企画しているためか男性の参加が少ないのが現状です。内容的に女性特有の問題を取り扱っているというより、男女関係なくキャリア形成を行う上で直面する壁の中で比較的女性に多く起こりやすい、環境問題、労働問題をテーマに講演されているので、

特にこれから若い女性職員を指導する立場に当たる方は、男女関係なく、お聞きいただけると嬉しいなと思う内容が多くあります。女性に限らず核医学診療を担ってくれる後進の育成は、私の周りでは非常に頭の痛い問題で、このような話題をお聞きいただくと、女性職員が働きやすいと感じて、勤務を継続、若しくは核医学を主体的に業務として選んでくれるのではないかと考えています。ご興味のある先生はぜひ次回はお立ち寄りください。

最後にPET/CTでは既にharmonizationに取り組まれていましたが、今回SPECT/CTの骨シンチにおいても同様の取り組みがなされた発表があり、興味深く拝聴しました。PET/CTのharmonizationの方法はある程度確立されており、施設の機器整備が進み、技師の経験が積まれれば解消していく印象を持ちますが、SPECT/CTはまだどのような方法でharmonizationを行うのか、というのが固まっておらず、評価法を定めるところからの出発であり、骨シンチの標準化の基準をどのような狙いで決めたかというのが、合目的で納得のいく発表でした。今後は半導体カメラ、SPECT/CT装置、SPECT装置が混在し、PET/CT装置と同様の議論が出るのは論を待たないと考えます。

PET/CT装置を持つ施設では、実臨床において自施設で患者さんの治療、検査が完結することもまだまだよくあることかと思われませんが、今後は患者さんが紹介元のPET/CT、SPECT/CTのデータをもって次の医療機関に受診することも多くなると考えられます。このような時に、相手施設との定量値の整合性などが取れることが今後は必要となると考えられ、ぜひこの部分に関しては技術学会の協力のもと、推進されることを期待します。

### 3. さいごに

学会の一部をご紹介したにすぎませんが、毎年新たな発見と知識・技術の向上を感じ、まだまだ潜在的な発展のすそ野が広がっている印象を受ける学会です。今後もますますの核医学会の発展を祈りつつ、締め言葉とさせていただきます。

((国研)国立国際医療研究センター国府台病院  
放射線科)